国公立大学入学者選抜試験の効果に関する実証的研究

鈴　木　規　夫

国公立大学志願者のための共通1次試験もすでに10年を経過した。その間それぞれの大学・学部にとってふさわしい能力あるいは適性を有した者を選抜するために様々な改善や工夫がなされてきた。

共通1次試験制度上では2種の試験が実施される。本稿では，様々な改善や工夫によって第2次試験がどのような影響を与えるか調べるため，共通1次試験から推定された潜在学力によって5つの典型的な学力型を定義した。この指標を利用して現行の選抜方式の結果とシミュレーションによる共通1次試験だけからなる選抜の結果を比較し第2次試験の効果を調べた。

分析の結果得られた知見の主たるものは次の通りである。

(1)　配点は公表された共通1次試験と第2次試験の合計に基づくが，成績は共通1次試験だけで選抜した場合，全ての教科に優れた者を選抜する結果となっている。しかし，第2次試験との組み合わせの総合判定によれば，ある特定の教科に優れた者を多く選抜する傾向が強くなる。

(2)　文学，法学あるいは経済学部において，国語，社会および外国語に優れた者を多く選抜することを望むならば，第2次試験としては国語，外国語の2教科を実施し，共通1次試験と第2次試験の配点比は55対45から45対55が望ましい。

(3)　工学，理学あるいは農学部において，数学や理科に優れた者を多く選抜することを望むならば，第2次試験としては数学，理科と外国語の3教科とし，配点比は第2次試験がより高い方が望ましい。